

---

# ドラマティック・ファイティング・クラブ！ （プロレス小説）

腎臓大事マン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ドラマティック・ファイティング・クラブ！ （プロレス小説）

### 【Nコード】

N4133BA

### 【作者名】

腎臓大事マン

### 【あらすじ】

京都の山奥にひっそりとそびえる同心館<sup>どうしんかん</sup>大学。

その大学の総合格闘部を引退した個性的な面々が

伝説の鬼の先輩、蛸山<sup>たこやま</sup>に命じられるまま

不意ながらプロレスラーとなり、弱小プロレス団体を

イチから、いやマイナスから立て直していく

血と汗とよだれと失笑といちご牛乳?!にまみれた青春群像。

だまされたと思って読んで、だまされてみよう！

作者の大学時代の体験がもたっていますが、  
実在の人物、事件とは一切関わりがありません。

・・・たぶん。

## 同心館大学総合格闘部10代目幹部の進路

### 第1話 同心館大学総合格闘部10代目幹部の進路

京都には実に多くの大学がある。

受験生や予備校の講師といえども、そのすべてを把握しているものはあまりいないのではないだろうか。

同心館<sup>どうしんかん</sup>という大学も、受験関係者があまり注目しない大学のひとつである。

京都と奈良の県境、とある山を切り開いてつくられたようなこの大学は、敷地ばかり広く、周囲に大学生が集まるような飲み屋もカラオケ・ボックスもなく、おまけに民家まで数えるほどしかないという田舎全開の環境にある。

ここの学生たちは、登校することを自主監禁と呼び、家に帰ることを下山、そして大学の外を下界と呼んでいるのだが、実際に足を運んでみればその表現も大げさではないと分かるはずだ。

さて、そんな同心館大学のさらに奥の奥、一般の学生なら四年間足を踏み入れないまま卒業するような場所に、古代中国を思わせるようないかつい建物がある。

武真館<sup>ぶしんかん</sup>と名づけられたその建物には、空手部などをはじめとしてさまざまな格闘系クラブの道場がある。

もっともこの建物も、その存在を知る学生からは通称、牢獄やら物置などと呼ばれているらしい。

確かにこの建物の中にある各クラブの部室を見ると、ごみ箱、もとい、物置と呼ばれても仕方ないと思わされる乱雑さがある。

その物置のそばに、格闘系のクラブに所属するむさくるしい男たちが集まるラウンジがある。

良く言えば休憩室だが、雰囲気としては、朝のラッシュ時に四方を小太りで厚化粧のおばさんたちに囲まれたような、いやな熱気にあふれる空間というのがしつくり来る。

そんな場所で今、六人の男たちが放心したような顔で天井を見つめている。

彼らは総合格闘部という比較的歴史の浅いクラブに、つい今しがたまで所属していた。

今しがたまでとは言っても、彼らは別にクラブを追い出されたわけではない。

今日は彼らの引退稽古だったのだ。

彼らの放心した表情は、クラブを引退した寂しさからくるものなのであるうか。

数々の思い出が今彼らの心の中で美しく昇華しようとしているのであるうか。

残念ながらそうではない。

彼らは本当に、ただただ単純に疲れているだけなのだ。

会話の内容を聞けばそれがよくわかってもらえるだろう。

しかし彼らは、約十分間呆けた顔をしたまま誰も口を開こうとしない。

その顔つきは魂を吸い取られた老人のようであり、若者らしい情熱はかけらも見受けられない。

このまま彼らが沈黙を保ったままだと、この物語は進展していかないかもしれない。

では、いったいこの先どうなる？と、ごく一部の心やさしい読者の方々が心配してくれたであろうそのとき！

ついに一人の男が席を立った。

身長１８８センチ、体重は百キロに及ぶだろうか。かなりの大男

である。

彼はそのままラウンジの隅にある自動販売機へ向かい、おもむろにイチゴ牛乳を買った。

その場でストローをさし、一気に飲み干すと満足げに笑った。

なんとも知性的でない下卑た笑顔である。知能指数はチンパンジー以下といった風情だ。

付け加えて言うと、男性ホルモンは豊富なようで体毛が異常に濃く、ふけた顔をしている。

先ほど飲んだイチゴ牛乳が、口ひげについてピンクに固まりかけている。

それに気づいているのかいないのか、彼は口元をべろりとなめまわし、例のスケベ顔でもう一度自動販売機の前に立ち、今度はイチゴ牛乳を二本買った。

自分の席に戻ると、彼は嬉しそうにそのすべてにストローをさし、三本のイチゴ牛乳を一気に吸い上げていった。

ズルズルズル、ジュポツ？

彼の足元には空になったイチゴ牛乳が十本以上散乱している。

飲み終わると一度だけげっぷをして彼はまたもとの態勢に戻った。どうやら行動終了のようである。

……、これでは本当に話が進まない。

この際彼らの取る意味のない行動はすべて無視して、こちらで話を進めよう。

## 1話（その2）

さて、たった今イチゴ牛乳を買いに行った男であるが、彼は名を元瀬敏男もとせとしおという。

東京生まれのフランス育ち、生意気にも帰国子女である。

しかし、日本人学校に通っていた小・中学生時代に友達はおらず、日本語でのコミュニケーションもままならないままに高校時代以降を大阪で過ごすことになる。

大阪の水が肌に合ったのか、移り住んだ家の裏がソープ街という環境が良かったのか？敏男は大阪で持ち前のオヤジ魂を開花させ、現在の性格を形成する。

躁鬱病の疑いがかかるほどの気分屋ではあるが、ハイなときにはクラブの後輩（男・二回生）を風呂場で本当に犯しかけるような明るさ？を持っている。

指まで入れられたところで、何とか危機を免れた後輩（男・二回生・19歳）は次の日、退部した。

クラブの活動に対してはあまり熱心ではなかったが、相撲部の助っ人として同心館大学を関西一位にしたことがある。パワーには定評がある逸材なのだ。

もともと総合格闘部というのは、人員不足に悩む格闘系クラブの助っ人のためにつくられたようなクラブだった。

そのため最初はサークル的なノリだったのだが、ある男の出現がこのクラブの運命を変えた。

その男もいずれこの話には絡んでくるので、そのときに詳しく説明するでしょう。

さて、元瀬敏男の紹介だったが、もう他に面白いネタはなさそうだ。

しいて言えば、イチゴ牛乳とパンストが好きで、恋愛と政治の話が嫌いという特徴があるぐらいか。それから彼は、何かを言い終え

た後に意味不明の奇声をあげることが多いが、少年時代にコミュニケーションがとれなかったことの名残なのだろう。

同心館の中では一番学力のレベルが低いとされる工学部の学生なのだが、本当は頭が良いと言い張っており、卒業後は東大の大学院に本気で進学するつもりでいる。

もちろん他の部員はそんなことは起こりえないと思っているわけだが、一人だけ、敏男を応援するものがある。

今敏男のとなり、六人掛けテーブルの真中の席で足を組んでビジュアル系ながらのポーズを取っている男がそれだ。

彼の名は名月純。なつきじゅん法学部の四回生、一浪、仙台出身。

身長178センチ、72.3キロと筋肉質な割には比較的痩せ型。なかなかの二枚目、ロン毛。

なぜ敏男を応援しているかというと、彼自身、司法試験に受かるという大目標を掲げているからだ。

もっとも純の場合は、本心からではなく、この先も学生を続けたい一心で言っているだけだろう。

司法試験に受かるためにとさえ言えば、郷里の親はいつまでも学費を出しつづけてくれるらしい。地元ではかなりのボンボンだったようだ。

仙台出身だが田舎くさはひとかけらもなく、この六人の中では一番洗練された都会的な感じがする。

話す言葉も標準語で、それなりに機知に富んだことも言う。

総合格闘部員のくせに、得意種目はサッカーとテニスとバスケ、特にサッカーでは高校時代にプロがスカウトに来るほどの活躍をしていたらしい。

なかなかのナイス・ガイに思えるが、それだけで終わるようではこの六人の中には入っていないかっただろう。純にもやはり一癖フタクセ、かなり異常な性癖があるのだ。



それについて話を進めようと思った矢先、純の携帯電話が目覚し時計のような音をたて、重々しいラウンジ内の沈黙を破った。

ところが純はディスプレイを一瞥すると、応答すらせずに電話を切った。

「またか」

誰かがあきれたようにつぶやくと、純は苦笑いを浮かべた。

その表情が消えないうちにまた携帯が音をたてた。

「しつこいな」

と言いながら、電話を切る純。

そしてしばらくしてまたコール。

また出ずに切る純。

そんなことが何度も何度も繰り返された。

他の部員たちは慣れっこになっているのか特に気にした様子もない。

しかしとうとうしびれを切らしたのか、敏男が叫んだ。

「うるさいなあ、いいかげんに電源切れよ！ウキョーッ！」

純は困ったように答える。

「オレもそうしてえけどさ、あの人から電話かかってくんだろ？」

とたんに他の部員の顔から血の気がひいた。

先程までの気の抜けた6つの顔が一気に緊張で引き締まる。

「……、あ、あの子のことは電話がなる直前まで忘れてよう」

誰かがそう言うと、みんながうなずいた。

「どうやら”あの人”からの電話を待っているために、純は携帯の電源を切れないでいるらしい。」

あの人とはいったい誰なのか。…ま、そのうち登場するだろう。

今は彼らの言うことに従い忘れておこう。

さて、純の携帯だが、相変わらずいたちこつこを繰り返している。

いいかげんに疲れたのか、それともボタンを押し間違えたのか、純の携帯からかすかな話し声が聞こえた。泣き声の若い女性のそれのようだ。

仕方なく電話に出る純、にやつきながら様子をうかがう部員たち。「ハイ、うん、オレ。……、出たくないから出なかっただけだよ……、だって、お前と話することなんてねえじゃん。……、うん、話しても面白くない。人生においてこれっぽっちも得にならない」

「相変わらず、ボディーにきくような会話やのう」  
誰かがよこやりを入れる。

純はそれに笑顔で答えながら、電話口では真剣な声をキープする。「あんなのウソに決まってるじゃん。……、だいたいさあ、お前みたいなのが本気で俺みたいな奴に相手にされると思う？遊んでやっただけでも幸せに思えよな。……、うん、勝手にすりゃいいよ。逆にそっちのほうが、オレのためにも世の中のためにもいいんじゃない？……、どうぞご自由に。じゃあな、二度とかけてくんないよ！」話し終えると純はけろつとした表情で他のメンバーに言った。

「もう、この女典型的な馬鹿。死ぬとか言ってるの」

「ひ、久しぶりに聞いたな。お前の本音、女に対する……」  
慣れているとはいえ、他の部員はさすがに眉をひそめている。もうお分かりであろうか。

この男、名月純は異様に女グセが悪いのである。部員たちは彼の名前をもじって、女好き・不純と呼んだりもする。おまけに純は人の心の痛みをまったく気にしない。というよりも、人が一番傷つくような会話をするのを楽しんでいるふつもある。

サッカーの試合でも相手が気にしているようなことを耳元でつぶやいてボールを奪うことが多かったらしい。

クラブの練習はマジメに来るほうではなかったが、持ち前の運動神経と要領の良さで、空手、柔道、日本拳法など、最終的に六つの競技で黒帯を取得した。

幹部になってからの役職は会計だったが、集めた部費はすべてナ  
ンパの資金となっていたらしい。

とにかく一言で言えば人間的に問題のあるオトコなわけである。  
それでも、好きな言葉は誠意と友情と真顔でこたえられる彼は、  
部員たちから奇妙な尊敬を受けている。

## 1話(その3)

携帯の一件が一段落ついたかと思うと、純の正面、反対側の席の真中にいるさらに別の大男が奇声をあげた。

「ああああああ、名月がしょうもない電話したせいでまたあいつが出てきよる！あいつがあああああっ！」

と男は叫び終わると頭をたれた。

他の部員たちは、またかと言うように顔を見合わせたため息をついた。

今、叫び声をあげてぐったりとなった男は、平木基樹ひぎききという。身長は188センチほどもあるのだが、体重が70キロぐらいしかないので長ネギのような印象を受けるだろう。

それでも彼はクラブに対してはかなり熱心なほうで、統制部長というクラブの監視役を勤め、各種の格闘系の大会で必ず上位に食いこむ底力を持っている。

日本酒を飲みながら男の生き様について語るのが大好きで、後輩の面倒見も良い。

顔は少しこわもてだが、どことなく愛嬌のある口元が特徴的で、男前とは言えないが決して悪くはない見た目だ。ちなみに出身は山口県、一浪している。

ここまでは特に問題のない男のように思われるが、基樹には決定的な弱点があった。

それは……。

ここで基樹はムクリと顔を起こした。

その顔つきは先ほど叫び声をあげていた様子と違って、妙に女性的でずるがしこそうな笑みをたたえている。

そして、一言。

「ちよつとお、聞いてたわよお純ちゃん。あんたいくらなんでもあんな言い方はひどすぎない？」

語尾を鼻声で上がり調子で読む、早く言えば典型的なオカマ言葉だ。

「いや、まあ、オレにも色々あんだよ」

純は目の前にいる変わり果てた基樹から目をそらした。

「色々って何よお、アタシに説明してちょうだい！」

と言つてむくれる基樹。もとは大男だけに気持ち悪いことこの上ない。

「それとなんなのよお、あんたたちシャワーも浴びないでボーっとしてえ、くさいわよお、むさいわよお、あーっアタシもう耐えられない！」

そう言つと、基樹？は汗をかいた胴着の胸をはだけた。

「ちよつとあ、じろじろ見ないでよ。敏男ちゃん？」

「あーっもう、うざったいなあ。オレらは大事な電話待つてんの！」

その言葉をきっかけに他の部員たちも口々に叫ぶ。

「帰ってくれよ、レイコママ」

「帰れよ」

「元に戻れ！」

などと言い方はさまざまだが、今彼らは一様に基樹のことを『レイコママ』と呼んだ。

「何よお、またアタシばかりのけものにしてえ！」

レイコママと呼ばれた基樹が顔を真っ赤にして叫ぶ。

「大体、アンタたちの大事な用ってなんなのよ！」

真正面から睨みつけられた純が仕方なく答える。

「…蛸山たこやまさんから電話がかかってくるんだよ」

「ええっタコちゃん？久しぶりじゃなーイ？あたしにも話させてね？ね？」

その言葉に残る五人はいっせいに鬼のような顔になって声をそろえた。

「絶対、だめ！」

「ケチ、もういいわよ！ふん、二度と出てきてあげないから！」  
そうまくし立てると、レイコママ、いや基樹はまたガクリとうなだれた。

「ふう、今日はまだ聞き分けよかったね」

基樹の横で会話に参加せずに笑っていた男がつぶやいた。

彼のことはまだ放っておくとして、まずは基樹である。

どうやらもとの顔つきに戻ったようだ。

「どうやった？また迷惑かけた？」

基樹が心配げにたずねる。

隣に座っている、先ほどの男が高い声で答えた。

「ううん、今日はそうでもなかった」

「お前がえらそうに言うな！何もしてへんやんけ！ムキョー」

お分かりとは思うが、敏男が言った。

「そうか、まあ、良かったわ」

と、基樹は胸をなでおろした。

「良くねえよ、この変態！」

一番からまれていた純は納得がいかないようだ。

「変態って言うな！オレかって好きで二重人格してないんじゃ！」

基樹も負けじと叫びかえす。

そう、すでに気づいた方もいると思うが、今基樹自身の口から説明があったとおり、彼は平木基樹の中にもう一つの人格を持っている。

それが先ほど一悶着を起こしたレイコママだ。

彼女、実は彼と言ったほうが正しいのだが、は三十代後半のお笑い系オカマ。その世界ではなかなか名の知れた存在で、二つの店のママをしている（という設定）らしい。

基樹が小学二年生のころ、お盆で遊びに来ていた親戚のお姉ちゃん（19歳・短大生）が、家の裏にある茂みの中で弟のチンチンをいつもとは違う顔つきでいじめている（当時の基樹の印象）現場を目撃してしまい、なぜか泣き出しそうになったその瞬間。

「いいじゃないのお、よくある事よお」

と言いつつ心に入ってきたのがレイコママだったらしい。

自分の知らない大人の世界の話をたくさん知っているレイコママを妙に気に入った基樹は、それ以来彼女と精神の共有生活を続けているのだ。

不思議なようだが、基樹とつきあった人間は否応無しにそれを信じてはいられなくなるだろう。

基樹自体この状態に慣れてしまっているようで、特に不便はないという。

ただ、集めていたポケモンのデータを消されていたときや、つきあっている彼女とひとエッチやり終えて眠っている間に現れたらしいレイコママが勝手に二回戦をしたらしく、基樹自身が目覚めたときに彼女から『二回目の、すごく良かったあ』と言われたときにはレイコママを消し去る方法を本気で考えたらしいが、結局このままが落ち着くようである。

基樹自身はレイコママに特に不満はなく、二重人格者としては清く正しく生きているという、変なプライドを持っているらしい。

ところがレイコママに振り回される基樹の周りには評判が悪い。純もそのうちの一人だ。

「とにかくもうオレの前には出すなよ！」と、純。

「勝手に出てくるんじゃない！仕方ないやろが」

と二人でまだ言い争っている。

もともとレイコママのことだけではなく、この二人の仲は悪い。

男の生き様を愛する時代遅れタイプの基樹は、格闘技以外のスポーツをすべてチャラチャラしとる！の一言で片づける。サッカーなどはその代表格だ。

一方、純は時代錯誤の根性論を徹底的に嫌っており、おまけに基樹の顔が生理的に嫌いなどと思慮の浅い女子高生のようなことを平

気で言つてのける。

結果、二人の間には単純な反感が生まれ、先ほどのようなことになるわけである。

「まあまあ、もうやめなよ二人ともお」

と、高い声が純と基樹の間を分けた。第四番目に紹介される男、志摩犬健しまいぬけんである。

基樹のとなりで何度か口を挟んできたのだが、声が高いのと妙に弱々しい話し方をするうえに、性格的にもおとなしいので、他の部員から相手にされないことも多い。

かといって存在感がないわけではなく、特に体つきや見た目などは他の部員たちよりもよほど個性がきつい。

身長は175センチと普通なのだが、体重が130キロ以上あるのだ。

おまけに若くして髪の毛が薄く、頭はカツパ状態となっている。

安アパートに下宿しているのだが、健康のことは気にかけないのか食生活はかなり悪いようで、その結果が顔いっぱいのにきびや吹き出物となって現れている。夏場は、そこからさらにおかしな汁まで出てくるのでさながら太ったゾンビである。

入学当初はコンタクトをしていたのだが、合宿中になくしてしまい新しく買う金もないので、今は中学時代に使っていたメガネをかけている。ただ、当時より二倍近く面積の広がった顔にかけているため、メガネが顔面にはりついているような感じになっている。

と、見た目はかなり最悪かも知れない（おまけにワキガという弱みもある）。それでも格闘家としての彼は素晴らしい選手なのである。

専門は柔道で、二回生のころ全日本学生大会の無差別級で優勝を果たしている。

一度極めた競技を長く続けてはいけないという総合格闘部の決まりごとに従い、三回生からはじめたレスリングでも練習試合でオリンピック参加選手の大学生から勝利している。投げ技やグラウンド



に関しては、誰もが認めるクラブのナンバー・ワンである。

それでも気が弱いのと、先述の見た目と、おまけに岐阜出身であるというわけの分からない理由から他の部員たちの遊び道具的存在となってしまうのだった。

幹部になってからは、主務というマネージャー（雑用係）のようなことをしていたのだが、誰一人として健の苦勞をねぎらう者はいない。

そんな環境の中でも、健は黙々とクラブのために尽くしてきた。いい奴である。

その働きぶりに神様がご褒美をくれたのか、今年の春、健に生まれて初めて彼女ができた。

そこから健は変わった。

もともと中学時代から毎日五回オナニーをすることを日課としていた彼である。

彼女ができてそのペースだけは乱れなかった。いやある意味では乱れた、パートナーができたことによりさらに回数が増えたのだ。彼女の方も健がはじめての男だったということ、何も分からずされるがままになっていたので、今では一日に十回近くセックスするのも普通のことだと思うようになってしまったらしい。

二人とも下宿で、歩いて二分の距離に住んでいるため半分同棲しているような感じになっており、健はクラブを休んでまで野性の本能に従うようになった。

ただ健がクラブをサボるようになったからといって、特に不便は起こらなかったため、部員たち（後輩も含む）はますます健を軽んじているとのことだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4133ba/>

---

ドラマティック・ファイティング・クラブ！（プロレス小説）

2012年1月10日22時56分発行